
契約に御用心

ラッキーライン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

契約に御用心

【Nコード】

N 6 4 7 9 Q

【作者名】

ラッキーライン

【あらすじ】

「契約せしものよ。この契約を誓うか？」

「はい……………」

主人公、佐奈はごくごくふつうの中学生だ。しかし、変な夢を見てからなんと四次元の世界に迷いこんでしまった。そこには、変な性格の王子やイケメンの誘拐犯が……………?!

第一話『四次元に迷いこんだ子羊』

「契約を誓いし者よ……そなたが13歳になるとき……必ずこの地に
戻って来ることを誓うか？」

「はい……誓います。」

ジリジリジリジリジリジリジリジリジリジリジリジリジリジリジリジリ
~~~~~

目覚ましが鳴っている。いつもの朝だ。

「んー。はあ。また同じ夢。なんなんだろう。」

私、佐奈は最近同じ夢ばかりを見ている中学生だ。

「もうっ！ほんと이야っ！『契約を誓いし者よ』ってなんの契約よ  
！」

もちろん、契約なんかした覚えはない。だから不思議なのだ。

「しかも、なんで13歳なの！はあ、よりによって今日は……」  
そう、今日は13歳の誕生日なのだ。

「佐奈」。朝ごはんよ。早く食べないと遅刻するわよ。」

「はい。」

（はあ……。いやな予感がする……。）

「行ってきます。」

「いつてらっしやい！」

.....

靴の音ばかりがこだまする。

「はあ……………」

私はさつきからため息ばかりついている。

（ああ。こんなに誕生日がいやになったことなんて一度もないよ……ん？なんだあれ？）

私が見つけたのは……。四角い箱。立方体で一辺が1メートルくらいの白い箱。フタが開いている……………。

（なんだ。何も入っていないじゃん。よかった。）

私は何も入っていないことを確認すると、また歩き出した。が、その時見事につるつと滑って箱のなかへ。

「きやあああああ……。」

その声もむなしく私は頭から箱に突っ込んだ。

(やばい。頭打つ！)

そう思ったが案の定頭はぶつからずそのまま、真っ逆さまに落ちて行った。

ぼふっ

私は柔らかいベットへ落ちた。

「いったあ。てかここどこ。」

そう。私が落ちたところはまったく知らない場所だった。壁は真っ白で何となくお姫様の部屋のような感じだ。

「はあ。ほんとここどこだろ。」

私がつぶやいたその時だった。

「佐奈。ようこそ。」

と後ろから声がしたのだ。

「あなたさだれ！」

恐る恐る振り向くとそこに立っていたのは夢に出てきた人だったのだ。

「僕の名前は輝。ここの一応王子さ。」

その、王子と名乗る輝は私と同じくらいの身長で顔は結構イケメンの男のだ。

「ここのとて……、だいたいここはどこ？私はなぜここへ落ちたの？しかも、どうしてあなたは私の名前を知っているの？」

「まあまあ落ちついて。じゃあまずここはどこかということから説明するよ。」

ここは、簡単に言えば四次元の世界。ここに住んでいる者達は全員時間が操れるってわけだよ。」

「へえ。だけど、それだけじゃ私が来たわけと繋がらないわよ。」

「まあ、続きを聞いていれば分かるよ。」

それで、全員時間が操れるから当然悪いことをするやつもいるんだ。

でもある人がいるだけでそういう悪いことができなくなるんだ。で、そのある人っていうのが貴女、佐奈なんだ。」

「わっ私?！」

思わず声が裏がえる。

「まさかそんなはずないじゃん。それになんで私なの?!」

「それは、佐奈が幼い頃にここへ来て契約をかわしたからだよ。右手をかせてごらん。」

私は言われた通り輝の方に右手を出した。

「じゃあ。今から契約のあかしを見せるよ。」

そう、一言言うと輝は小型のライトを私の右手に当てた。

「あつ……。なにこの模様?！」

「この模様はこの世界の紋様の様なものだよ。」

「うん。」

「いいんだよ心配しなくても。この模様はライトを当てなければ見えないから。」

そう言って輝はライトを消した。

「佐奈。貴女は何もしなくてもいいんだ。この世界にいてだけでいい。そうすれば悪いやつらは何もできないんだ。」

「でも、お母さんが心配するし……。帰らないと。」

「それは大丈夫。こちらの一年は向こうの一秒だから。」

「でも……………」

「お願いだ！この通り！たのむ！」

輝は私に土下座をしてお願いしてきた。

[illegible]

何回も何回もぐるぐると『迷う』という言葉がめぐる。

向こうにはお母さん、学校。

こちらには輝、国民。

「……………」。  
わかった。とりあえず三日だけいてそれから先は私

が決める。」

「ありがとうございます！寝泊まりはこの部屋を使ってください。あと、この世界を自由に散歩していいよ。じゃあ！」

（まあ、仕方ないか。さあてとまずはこのお城から探索しよう。）  
私はそう思いますこの部屋から出ることにした。

『ギギギギギギギギギ』

木の扉を開けるとそこには長い長い廊下があった。

「うっわ〜！長い廊下！さすがお城！でも、どこに行こう……。あつ！あそこにメイドさんが！聞いてこよう。」

私はたまたま通りかかったメイドさんに聞いてみることにした。

「あの〜。このお城に面白いところありますか？」

私が恐る恐る聞いてみるとメイドさんはにっこり笑って

「図書室に行ってみてはどうでしょう？」

と答えてくれた。

「ありがとうございます。」

私は一言お礼を言うと図書室へ向かった。

「えーと、まずここを右にまがって……。」

私はさっきのメイドさんがくれた地図を見ながら図書室を探していた。

「……………えっと、確かこの辺りなんだけど……………あったっ！」

『ギギギギギギギギギ』

重い扉を開けるとそこには沢山の本棚が並んでいた。

「すごい……………」

そう、すごいのだ。私が通っている学校の図書室よりも、町の図書館よりも、もっともつと広い。

（流石お城！規模がちがう！）本好きの私にはとてもうれしい所だ。  
「何を読もうかな。」

奥の方には推理小説、手前の方にはファンタジーもの。どちらも好きだがファンタジーの方がどちらかというと好きだ。

「佐奈。図書室はどう？広いだろ。」

いきなり声をかけられ少し驚いたがすぐに声の主はわかった。

「うん。まあね。……それよりどうして私がここにいるってわかったの？」

そう聞くと、輝はにっこりと爽やかな笑顔を浮かべてこう答えた。

「野生の感かな？」

「んなわけないだろー！」

私は声が枯れるくらい大きな声で怒鳴った

## 第一話『四次元に迷いこんだ子羊』（後書き）

どうも、こんにちは、または初めまして。ラッキーラインです。この小説を読んで下さってありがとうございます。私はもう一つ連載を書いています。しかし、なかなか読んでもらえていません。もしよろしければそちらもどうぞ！

では、また次回！

## 第二話『なんなんだろこの世界』（前書き）

注意

お説教が多いため、「がみがみ」という言葉が多いです。

## 第二話 『なんなんだろこの世界』

「まあまあ。冗談だよ冗談。佐奈みたいな反応初めてみたよ。」

輝はそう言々とクスクスと笑った。

ブチーン

私の頭の中でなにかが切れる音がしたような気がする。

「輝っ！！あんたねっ！！」

お説教開始………！

[illegible]

お説教終了……！

「……ごめんなさい。」

「よろしい！」

「本当は城のメイドに聞いたんだよ。」

まあ、普通はそうだろう。野生の感だったら逆にすごいが。

「今度そういうこと言ったらもつとお説教するから覚悟しなさい！」

「わかった。あつ、だけど興奮してる時は分かんないかもしれないから」

「興奮って……。あんたがどういう時に興奮するか分かんないし！」

「うん。たとえば、おもちゃを買ってもらった時とかかな。」

「ふん。意外と幼稚なのね輝。」

少しだけ輝を見損なった気がするのには気のせいだろうか。確か輝は私と同じ年だったはず。そしたら、余りにも幼稚すぎる。思わず私は輝をまじまじと見つめた。

「なに？僕の顔になんかついてる？あんまり見つめられると照れる

L

)

L

•

お お お

•

L

L

05

•

L

よ せ

•

•

)

L

!

•

の の の



## 第二話『なんなんだろこの世界』（後書き）

すいません。だいぶ、前回と間が空いてしまいました。今度はなるべく気をつけます。  
では、また次回！

### 第三話『佐奈、イケメンにさらわれる』

「まったく……！輝の奴め！危うく声が出なくなる所だった。」

私は、今街へ向かっている。城を出た後少し道に迷ってしまったが、農家のおじさんに道を聞きなんとか遭難せずにすんだ。

「確か、もう少しで街が見えてくるはずんだけど……。あつ！あれかなあ。」

目の前に見えてきた街は、なんとというか色合いが微妙だった。街の南側は赤系の色の建物。北側は緑系の色、西側は白系の色、東側は青系の色の建物だった。

「変な色……。。。。。」

「そうだよなあ。俺もこの色合い嫌いなんだあ。」

「そうよね……。。。。つてあんた誰!？」

私はギョツとして後ろを振り返った。そこにいたのは案の定知らない男だった。しかしこの男も輝に負けなくらいのイケメンだ。少し焼けた肌にこげ茶の髪。山賊風の服を着ていてなんとなくワイルドな感じがした。

「『あんた誰』は酷くないか。……俺の名前は一夜。よろしくな。」

一夜はにつこりと優しく笑った。一夜は輝よりくだらないことを言わないような気がする。私は先ほどの様にまじまじと一夜を見つめた。

「何?……あんまり見つめられるの慣れてないから照れるんだけれど。」

ポツ

「ワザトデスヨネ?」

私は、黒い笑顔を浮かべて聞いた。

「ちっちがうちがう!わざとじゃないない。」

「ワザトデスヨネ!!」



そう言いかけてふらっと倒れそのまま寝むってしまった。

「ごめん……………」

一夜の声が静かに響いた。

「……………からかい過ぎたかな……………」

僕はふわふわのベットに腰を下ろした。つい、からかってしまったがやり過ぎたかもしれない。

「かわいかったなあ。困った顔。」

佐奈は困ると、とてもかわいい。こんなことを思う僕はかなりのSかもしれない。そんなことをふと考えていると、急に扉を叩く音がした。

「どうぞ。入れ。」

「王子！大変です！佐奈様が一夜と言うものにさらわれました！」  
「なんだと！」

一夜と言えば一人しか思い当たらない。それは大変だ。

「すぐに、僕が助けに行く。おまえは援護を呼んで来てくれ！」

僕は棚にある拳銃を取り急いで佐奈の元へ向かった。

（頼む佐奈。無事で居てくれ……………。）

「かわいい寝顔。俺なんか見てよかったのかな。あははは……。」

「間抜けな笑いをした後俺はそつと佐奈の頭を撫でた。」

「本当は元の世界に帰そうと思ったんだけど……どうしようかな。予想よりかわいいなんて……。」

まあ、ぐちぐちとお説教をされるのはいやだが。

「でも……佐奈には不幸になってもらいたくないな。……」

そつえばもう城には伝わったかな。輝の奴焦ってるだろうな。まっあいつには負けねえけど。」

そついいながら俺は弓と矢を磨く。

「もうすぐ敵がくる……」

そつ、もうすぐだ……。」

### 第三話『佐奈、イケメンにさらわれる』（後書き）

どうも、ラッキーラインです。さて契約に御用心も三話目です。早いですねえ。びっくりです。しかしなんだか大変なことになりましたね。でも、今更拳銃と弓矢だったら拳銃の方がいいんじゃないでしょうか。まあ、実際はわかりませんが。

今回はお知らせがあります。今度の四話目が終わったらなんと番外編をやります！急ですがやります！理由は本編でやれないことをやりたいからです！どんどんリクエスト聞きます！

後書き長くなつてすいません。ではまた次回！

#### 第四話『俺の姫君、僕の姫君』

「佐奈、起きないなあ。もしかしたら薬の量まちがえたかもな。」

「うん。だけど、主人がまちがえたりするのかな。」

「さあね。」

ひそひそひそひそ

また、あの三匹が自分の悪口を言っている。

「おい！俺がまちがえるはずがないだろう！コウ、ライ、ユウ！」

「すいません。」「ごめんなさい。」「すいやせん。」

俺は一喝すると佐奈のもとへ向かった。

佐奈のいる部屋は、この家の一番奥にある少し広い部屋だ。

「まったく、あいつらときたら……………」

そうつぶやきながら佐奈の頭をなでる。佐奈の髪はふわふわしていてなでごこちがとってもいい。

「でも……………ほんとに起きるのがおそいなあ。まったく大丈夫だろうけど。」

大丈夫と自分に言い聞かせる。ほんとの所は不安でしかたないのだけれど。

「早く起きてね……………俺の姫君……………」

「はあはあはあ．．．．．。まったく、一夜のアジトはどこなんだ．．．．．。」

僕は、城を出てから約1時間以上も、森をさまよっている。けつして迷ってはいないが森は広い。そう簡単には見つからない。

「くそう．．．．．。一夜め．．．．．早く佐奈を見つけなければ。」

「そう、早くしなければ。一夜は、この国でも有名な指名手配犯なのだ。金持ちの家に入っては宝石を盗む。しかも、その後時間をもとに戻して証拠を消すのだ。そんなやつならば、『契約せし者』の佐奈をもとの世界に戻すこともできるはずだ。」

「早く、急がなければ．．．．．。」

そう言いかけたその時！！

『ヒュン』

目の前を矢が通った。その矢は近くの木に刺さって止まった。その刺さった矢をよく見ると何か手紙が結んである。

「なんだこの手紙……『王子へ。佐奈は俺のアジトにいる。返してほしければこの道をまっすぐ進んだところにあるアジトにこい。一夜。』なんだと！」

一夜め．．．．．。僕は手紙をくちやくちやにして丸めると走り出した。

「無事でいてくれ．．．．．。僕の姫君．．．。」

「よく来たな。おじけずいて逃げたと思ったよ。」

「んなことあるかよ。一夜、佐奈はどこだ。」

まったく。こいつはいつも俺の作戦に引っかかる。なんで、こんな奴が王子なのかわからない。

「佐奈は奥にいるよ。だけど簡単にはいかせないからね。」

「のぞむところだ!!」

そう、この王子が告げるといきなり拳銃を撃ち始めた。ふっ。弱いこいつなんかにてこずるもんか。

「まだまだだね。王子ちゃん。」

「くそう!」

王子は感嘆の声を漏らしている。しかしこいつ、昔よりも腕が上がっている。油断はできない。俺はおもいつきり弓をいると矢を放った。

「くっ。」

もう少しの所でかわされてしまった。

(俺の姫君はわたさねえ!!!)

ちょうどそのころ。私はふわふわのベッドではなく………普通の布団に寝ていた。

「うん。あれ……ここどころ。」

辺りを見渡しても知らないところだと分かった。

「あつ！佐奈が起きた！」

「よかったね。」

「うん。」

聞いたことのない声に驚いたがここは落ち着いて聞いてみた方がよさそうだ。

「あの。貴方達はいったい………。」

「俺たちは一夜の子分の狼さ。俺がユウで………」

「俺がコウ！」

「俺がライ！」

ああ。一回耳鼻科へ行こう。狼がしゃべるなんてありえな………

・

「えっ！狼！」

「そうだよ！」

うそーん！……おちつけ……。ここは異世界だ。ありえる。

「それで、ここはどこなの？」

「ここは一夜のアジトだよ。佐奈はさらわれたんだ。」

またまたうそーん！

「それで、今一夜は？」

「一夜は輝って王子と戦ってるよ。」

「はあ？なんで戦ってるの！」

「あれ？分かんないんだまあいいや。でも、このままだとやばいよ。」

」

「・・・・・・・・分かった。止めに行く。」

「さっすが！」

そして、私は二人を止めるために二人のもとへ向かった。

（どうか、無事でいてください。）

#### 第四話『俺の姫君、僕の姫君』（後書き）

どうも、ラッキーラインです。最新、遅れました。すみません。それから前の、後書きで予告していた番外編ですが先に延ばします。本当にすみません。  
ではまた！

**第五話『争い、そこにあるものは』（前書き）**

残酷描写少しあり

↓注意下さい。

## 第五話『争い、そこにあるものは』

「なかなかやるじゃねえか。」

もう、戦いが始まって約一時間もたつ。途中で場所を移動したがその場所が悪かった。この森は驚くほど広く、まだ僕は全体を把握していない。しかし、相手は天下の指名手配犯だ。かなうはずがない。「ふん。そんなにやわじゃないよ。」

しかしそんな事を言いながらも油断はできない。しかも、さっきから銃を撃ち続けているのにもかかわらず一回も当たらない。それに比べて僕は一回腕にかすってしまった。しかも、その矢に麻酔が塗られていたらしく感覚がまったくくない。

「だいぶ、麻酔が効いた？」

「へっまだまだ。」

（お前には負けねえ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!）

「ねえ・・・・・・・・。。まだなの？」

私たちが家を出てからもう、30分以上はたっただろうか。一夜と輝は途中で場所を変えたらしく姿が見えなかった。家から狼三匹の鼻に頼り探しているのだが一向に着かない。

「うゝん・・・・・・・・。。においは強くなってるんだけど・・・・・・・・。。」

「だけど？」

「・・・・・・・・。。なんにも聞こえないだよ・・・・・・・・。。」  
「そうでやんす。」

まったく。あの二人はいつたいどこで戦っているのだろうか。早く見つけなければ必ずどちらかがきずついてしまう。

「・・・・・・・・。。はやく見つけないと・・・・・・・・。。」

（お願い、どちらもきずつかないで・・・・・・・・。。）

「王子ちゃん。そろそろ、やられてくんない。」

「いやだ!!!!!!!!!!」

まったく・・・・・・・・・・この王子はものすごく、往生際が悪い。とつととやられてもらえれば大歓迎なのだが。

「ねえ・・・・・・・・そろそろやつちゃうよ？王子ちゃん？」

「へつやれるもんならやってみな!!」

王子はずいぶん強気だが疲れてきたらしくさつきから何回も矢にあたっている。もう、ほぼ全身が麻酔によって感覚がなくなっているはずだ。もう、俺も疲れたし佐奈が来ると困る。もうやってしまおう。

「じゃあね、王子ちゃん。」

俺は、一番強い毒が塗ってある大きな矢を構えた。そして、矢をはなったが・・・・・・・・。。

「やめて~~~~~~~~!!!!!!!!!!!!!!!!!!」  
大きな声がしたと思うと案の定佐奈だった。しかも、佐奈は矢の前にたっている。

「どけ~~~~~~~~!!!!!!!!!!!!」

そう叫んだがもう遅かった。矢は佐奈の腕に刺さり佐奈の腕からはどくどくと血が流れた。

「佐奈・・・・・・・・・・。佐奈~~~~~~~~!!!!!!」  
「!!!!!!」

王子は佐奈の元へ駆けつけた。・・・・・・・・俺は、ただただそこに茫然と立ち尽くしていた。

．．．．．また、  
俺は．．．俺と王子の大事な者の命を奪ってしまった．．．．．。

『あつ！！佐奈！！声が聞こえてきたよ！！』

『うん！！』

『そうでやんす！！』

『やった~~~~~！！！！』

私はもうくたくたになってしまっていたがやっと見つかったのでも  
うひと踏ん張りだと歩く速度を速めた。しばらくして、一夜の聲が  
聞こえてきた。

『じゃあね。王子ちゃん。』

えっ．．．．．王子ちゃんってまさか．．．．．  
．．．。

『私止めてくるっ！！！！』

『まって！！危ない！！』

『えっ？！！』

ぐちょ！ぐしゃー！

激しい痛みが腕を襲う。恐る恐る腕を見ると腕には太い太い矢が刺さりそこからはどくどくと赤黒い血が流れていた。

『佐奈………………。佐奈ー！』

輝が助けにきてくれたが矢には毒が塗ってあつたらしく意識が遠ざかっていった………………。………………。

## 第六話『大切な人』

「佐奈……………」

俺は、ただただその場に立ち尽くしていた。まさか、佐奈が自分の打った矢に当たってしまうなんて思いもしなかった。

「おいっ！―一夜！―佐奈を……………よくも打ったな！―」

王子が、俺に向かって泣き叫ぶ。そこで、また、自分は佐奈を打ったということを思い知らされる。

「一夜！―早く、時間をもどせ！さあ、早く！―」

「ああ……………」

俺は、力のない返事をする呪文を唱えた。

「我は時間を使いしものだ。時神よ今我に力を！―」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ……………

いつもなら、ここで時間が戻るはずだ。だが……………いつまでたっても時間が戻らない。

「時間が戻らない……………」

「なんでだ？……………そうか、今日は新月。新月の日は時神から力を借りれない。」

……………ということは今日一日時間を戻せない。

「佐奈を……………助けられない。」

「くそっ！―いっただいどうすれば……………」

「主人！―今、佐奈が来なかつ……………えっ！―さっ佐奈！―」

「うそだろ……………。主人が、さっ佐奈を打つなんて……………」

「主人、どういうことでやんすか！―」

いつもの、狼三匹が俺をにらむ。

「……………」

「くそっ！僕があの時身代りになっていれば……………」

王子が嘆く。しかし、どうしても時間は戻せない。

「・・・・・・・・・・・・・・・・今何時だ？」

俺は、ユウに聞いた。が、答えてはくれない。それもそうだろう。一番、信用していた主人が契約せし者を打ったのだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・俺、佐奈を助けに行ってくる。」

ぐったりと倒れ、腕から血が流れている佐奈を抱き上げ、家に向かう。

「待てっ！待てっ一夜」

王子が叫んだが、無視してそこから走り去った。

（どうか・・・・・・・・助かってくれ・・・・・・・・・・・・・・・・）

俺が、家に着くともう夕方だった。運んでくる間に佐奈の顔からはだんだん血の気が引いていく。いくら、明日になれば時間を戻せるとはいえ死んだ者は生き返せない。

「佐奈・・・・・・・・・・。」

目の前に横たわっている姫君に声をかける。だが、返事はない。胸に耳を当ててみると弱い鼓動が聞こえる。

「……さてと、まず矢を抜かないとな。」

そう言つて、作業に取り掛かる。矢は運よくそんなに深く入つてはいなかった。慎重に矢を抜いていく。

「これで、良しつと。……俺はこの矢で佐奈を打つたのか……。」

俺は、抜いたその矢をバキヤと真つ二つに折つた。たまらなく、自分が憎かつた。自らの手で、自分の大切な人《佐奈》をなくそうとした自分が。

「佐奈、ごめんね……。」

やさしく、やさしく、呟く。どうか、瞳<sup>め</sup>を覚まして……。そして、また……。

俺の……大切な人……。

「一夜め・・・・・・・・・・・・・・・・。」

一夜は今さつきぐったりとした佐奈をまたさらっていった。

「なあなあ・・・・・・・・・・まさか、主人が打つなんて・・・・・・・・。」

「うん・・・・・・・・・・。」

「そうでやんす・・・・・・・・。」

シヨックだったのは、この三匹も同じだったらしい。かなり、元気がない。一夜はいつもそうだ。仲間を裏切り、大切な者を自分の手で失っていく・・・・・・・・。そうして、いつもいつも、一人で抱え込む。あるときも、そうだった。あるとき・・・・・・・・。正直に話してくれていたら・・・・・・・・こんなことにはならなかった。僕は、深い深いため息をついた。

「なあ、王子、俺たちで主人・・・・・・・・一夜を探さないか？」

「おまえたちと？」

「うん。人数が多い方がいいし・・・・・・・・いや、乗り気がないんだったらいいんだ。」

「・・・・・・・・まあ、やってもいい。」

僕は、ぶっきらぼうに言った。

「ようし！そんなじゃあしゅっぱっつ！！」

こうして、僕たちは、一夜をいっしょに探すことになった。

（佐奈、まってるよっ！！）

## 第六話『大切な人』（後書き）

どうも、第五話の後書きを消したラッキーラインです（・ヅ・）

いやあ、番外編いつになったらやれるんでしょうか……………

…。

気を取り直して、いきましよう。佐奈はこの次点では助かっていません。でも、多分死にません。

では、また次回！！

番外編！！『春が来た！！エイプリルフールだよ！！』上（前書き）

番外編です。本編にはまったく関係ありません。

番外編！！「春が来た！！エイプリルだよ！！」上

「ヤッホー!!!ライ」

「コウ」

「ユウだよ～～！！」

「おいっ！！！！勝手に挨拶するなよっ！！！」

「そうです！！勝手にやるな！！」

「も〜！！みんな騒ぎすぎ！！」

さあて、どうもラッキーラインです。番外編始まりました。すいません、遅くなりました。

「てゆうか、なんで、あんたがいるの？」

「うんうん！」

「そうでやんす」

うるさくて、すいません。ちなみに、いつも、最初に言い出すのがライで次がコウ、「……やんす」というのがユウです。これを、覚えておくと、便利です。

「で・・・・・・・・・・。今日は何をすんの？盗みだつたら俺がやるよ。」

ああ。ちがいますよ、一夜君。……ていうか犯罪です。

「うん、そうだけど。」

「さうっというな~~~~~!!!!!!」

あらら．．．．．え〜と。佐奈ちゃんが一夜君をお説教し始めたので番外編の説明をします。本編で、死にかけてるとは思えないわ．．．．．はい！！ではでは、今回は四月一日がエイプリルフールということでそれをテーマにやります。まずは．．．．．さっきからあまりしゃべっていない、輝君から！！どうぞ！！お楽しみください！！ベルよ鳴れ！！

ブーブーブー――――！！

！！！！！！！！！！

始まり始まり・・・・・・・・・・・・・・・・

番外編1「嘘をついても貴女はこちらを見てくださいか？」

「おい。佐奈くー！！」

あの声は輝だろうか。まだ、朝の5時だというのに何の用だろう。私は、まだ眠気でだるい体を起こして輝のもとへ向かった。

「何の用？まだ朝の5時じゃない！！」

「・・・・・・・・・・佐奈、今は夕方の5時だよ。」

「は・・・・・・・・・・？？」

ヤバい。頭が狂ったのだろうか。そんなことありえ・・・・・・・・

「うそ！！マジで！！」

窓の外を見ると、真っ赤な夕焼けが広がっていた。ヤベー。爆睡してしまった。うん。これはまずい。

「でも、まだ、・・・・・・・・・・。」

「ん？なんか言った？」

小さい声で、呟いていたので最後の方はよく聞こえなかつた。

「・・・・・・・・・・ていうことで、今日は、夜によく眠れないと思うので僕とすぐろくをしよう!!」

「は？」

「だから!!すぐろくをしよう!!」

「・・・・・・・・・・べつにいいけど。」

「やった~~~~!!これで、僕の作戦は成功するぞ。」

「作戦？成功？」

「あつなんでもないなんでもない。」

なんだか怪しい。輝はなにかを隠している。しかも、いつも私は日課で夜風にあたりながら、庭を散歩するのだ。つまり・・・・・・・・・・でもすぐろくは嫌いではない。べつにやってもやらなくてもどちらでもいいのだ。

「じゃあ、やろう!!」

「・・・・・・・・・・うん。」

「ねえ、このすぐろくなに??」

「え？これは、僕が作った『佐奈？輝、愛のすぐろく』だけど。」

「ながくね？しかかも、なんだよこの名前。」

輝が持ってきたすぐろくはA4の紙を8枚ほどつなげたくらいのこと・・・・・・・・・・すぐろく、大きいすぐろくだった。しかも、ますます変なものばかりだ。

「まあまあ。ほら、やろつよ。」

そうして、私は、しかたなく、すぐろくをやり始めた。

「今何時かしら？」

私はなにげなく時計を見た。

「だめだめ。時計は見ちゃだめ！！」

輝があわててなにかいってきたがきれいに無視した。あわてるのが逆に怪しい。私は、じっくり時計を見た。次の瞬間、私は輝のほうを見ていった。

「……………どういことだボケ！！！！」

私が怒った理由、それは、朝の5時を夕方の5時と騙したからだ。

「輝、あんたねえ！！！！」

「ちっちよと待つて。今日は4月1日なんだって!!」

「はあ？？？？？？？？？？？？」

「だから、エイプリルフルなんだって!!」

「……なんことどうでもいいわ!!」

! ! ! ! ! ! ! !

お説教開始・・・・・・・・・・・・・・

[illegible]

お説教終了……

「ごめんなさい。」

「まあ、今日はエープリルフールならしょうがないわね。」

私はにこりと笑って言った。

嘘をつかれても嫌いにならないよ.....

END

番外編！！『春が来た！！エイプリルフールだよ！！上』（後書き）

どうも、ラッキーラインです。ついに書きました、番外編！今回はもう1話あります。そちらも、見てください。  
ではまた、次回！

番外編！！『春が来た！！エイプリルフールだよ！！下』（前書き）

番外編続きです。これで、番外編は終わりです。

番外編！！『春が来た！！エイプリルフルだよ！！下』

え、前回に引き続き番外編です。どうも、ラッキーラインです。

「やつほ。またまた、ユウ」

「コウ」

「ライ」

「です。」

「ちょっと！また出しゃばって！ちょっとはえんりよしなさいよ！  
」

「そうです！！いくら、なんでも出しゃばりすぎ！！」

「こらこら。番外編を始めるんだろ！おい！次はだれだ！！」

あの。ちょっとお静かに。今回は、一夜君と佐奈ちゃんです。

「は？また私？」

「よろしく！佐奈！」

「へっうん。」

それでは、はっじまり~~~~~。

ベルよ鳴れ！！

ブーブーブー——————

第二話「そんな、嘘はつかないで……………」

イライライライライライライライライライライ……………」

・・・

私は、今日とても気分が悪い。朝、5時に起こされたうえ、エープ  
リールフルという理由で大ウソをつかれたのだ。

「まったく・・・」

そんなふうに独り言をいいながら城の庭を歩いているといきなり体  
が宙に浮いた。

「やあ！佐奈今日はすごくいい天気だね！」

「うん・・・ってまたおまえか！一夜！ていうかおろせ！」

「は？おろさないよ！だって今日はいっしょに街へ行くんだよ！」

「なんで！ていうか私に拒否くんはないわけ！」

「ああもう、静かにしてよ！もう、しょうがないなあ・・・」

そういつて一夜がとり出したのは睡眠薬。っておい。どこから持っ  
てきた！！

「は？だって佐奈が言うこと聞かないからわるいんじゃないよ。」

「んなこといっても・・・」

「ったく、しょうがないな・・・」

その瞬間私の体は中に浮いた。きづけば私は一夜に抱きかかえられ  
ていた。

「ちよつと！！なにすんのよ！！」

「だって、睡眠薬いやでしょ。」

「まあ、そうだけど・・・ていうか私の選択権利はないわけ  
！！」

「うん！！」

「この、アホンダラ！！放しやがれ！！」

「やだよ！！！！」

「放せ！！！！てか、おろせ！！！！」

叫び声もむなしく、私は強制的に連れて行かれた・・・。

「着いたよ!!」

「着いたって……ここが街？」

「あれ？佐奈来たことないの？」

「うん……。てか、おまえに連れ去られたからだよ!!  
この、馬鹿!!」

私は思いつき憎しみをこめて言い放った。街は以前、外観は見たが中には入ったことがなかった。まあそれもすべて一夜のせいなのだが。

「んじゃ行こう!!」

その一声で買い物はスタートした。

「一夜、あんたお金持つてるの？」

「うん。これ。」

「……。何この量!!まさか……………」

「うん。盗んだ!!」

「……。そんな声で言うことか？それ。ていうか強盗じやね。」

「……。あんた。こんなに盗んで大丈夫なの？ていうか犯罪  
なんだけど。」

「えー！大丈夫。証拠消したし。しかも、これが俺の仕事だからさ。  
これやしないと生きてけないもん。」

「それじゃ、職業変えなさいよ!!」

私は、思わず言った。その時、ちょうど通りかかった貴婦人がなにかひそひそと話しているのが聞こえた。

「やだわ……。あのかた、怪盗じゃありませんこと。」

「あら……。ほんとだわ。でも、あの隣のかたは契約せし者の佐奈様じゃありませんこと。」

「まあ……。きつと騙されているのよ。かわいそうに……。」

一夜が有名なことは知っていたがこんなことを言われていたとは……。私は思わず顔を曇らせた。

「大丈夫だよ佐奈。俺は平気だから。」

私が顔を曇らせたのに気付いた一夜は私にやさしい言葉をかけてくれた。だけど……。一夜の顔は悲しそうに歪んでいた。本当はつらいのだろう。だけど、私を元気づけるために嘘をついているのだろう。思わず私は一夜の手を握っていた。

「……。佐奈？」

一夜が不思議そうに聞いてきた。無意識にやったことなので言われて改めて気付く。

「いいじゃない。別に!!」

強くそう言うとな夜はにっこりと笑って

「まあ、いいや。」

と言った。

そのあとも私たちは買い物を楽しんだ……。

番外編！！「春が来た！！エイプリルだよ！！下」（後書き）

どうも、ラッキーラインです。まず謝罪。

[illegible]

輝より一夜の方が長くなってしまいました。しかも、投稿すごく間があいてしまいました。

次回からは本編にもどります。ではまた次回！！

第7話『思いよ届け・・・!』(前書き)

ひさしぶりの本編です。

第7話『思いよ届け……!』

すう……すう……すう……

規則正しい寝息が聞こえる。佐奈が打たれてから約1時間。俺は、ずっと佐奈の看病を続けている。まだまだ危ない状態だがなんとかまだ大丈夫そうだ。あと、30分で0時。もう少しの辛抱だ。

「佐奈……もう少しだから……どうか死なないで。」

頬につつと一筋の涙が流れた……。

「どうだ。臭いは？」

僕は、今ユウ、コウ、ライとともに一夜と佐奈の居所を追っている。まあ多分、アジトにもどつたろう。

「へえ。多分近いから……アジトにいるかも。」

「そうか……。ありがとう。」

さあ、二人の居所はわかった。あとは、そこにたどり着くだけだ。

「佐奈、必ず僕が助けるよ……。」

ただいま、11時40分。あと、20分で0時だ。はあ……。俺は、小さくため息をつく。あと、20分でも命の危険に繋がる。注意しなければ。本当は、ボスさえいればなんとかなるのだが。ボスは、俺を拾い育ててくれた。一体どこに行ったのだろうか。はあ……。

俺はまた、ため息をつく。

「佐奈。この思い届くかな。」

佐奈は寝むったままだ。

「着きやした。」

ただ今、時刻は午後11時55分。今行けばなんとか佐奈を助けられるだろう。一夜の力ではなく僕の力で佐奈を助けたい。

「さあ、行くぞ。」

こうして僕らはアジトへ入った。



「佐奈!!佐奈!!」

私は、名前を呼ばれ目を開ける。どうやら森の中らしい。

「よかった……」

目を開けるとユウ、コウ、ライの姿が見えた。

「あれ……私、矢に打たれて……なんで傷がないの？」

「主人と、あと王子が時間を戻したんだ。」

「時間を戻した?どういうこと？」

「あれ?王子から聞かなかった?ここの世界の奴はみんな時間が操れるって。」

なんとなく聞いた気がするが……そうだったのか。

「それで、どのくらい前に戻ったの？」

「うーん。佐奈が二人を止めに行く前くらいかな？」

「そう。ということは、改めて二人を止めなくちゃいけないわね。」

「佐奈、気をつけてよ。」

「分かってるって。」

こうして私は、改めて二人を止めるために二人のもとへ向かった。

「つと。何とか成功したか。」

「……ああ。」

心なしか一夜の声が低い。なぜだろう。

「俺は……。でも、俺は佐奈を打った。」

「一夜。でも……」

「いいんだ。この事実が消えない。俺は1番大切な者を打った。」  
「そっぴいながら、一夜がとり出したのは……ナイフ。おそらく毒が塗られているのだろう。」

「まさか、おまえ……」

「王子・・・・・・・・輝。佐奈をよろしくね。」

そういつて、一夜がナイフをふりかぶったそのとき!!

「やめなさい!!」

りんとしたかわいらしい少女の声でした。

思い、届いたでしょうか・・・・・・・・・・・・・・・・

第7話『思いよ届け……!』（後書き）

どうも、ラッキーラインです。今回はひさしぶりの本編でした。さて、佐奈助かりました。余談ですが、輝は「てる」「じゃなくて」「ひかる」です。前、友達にこれを見せたとき「てる」とよんだので・  
・・・・・。

また次回!!

## 第8話『闇はすべてをのむ』（前書き）

一夜君、自殺未遂します。残酷描写いちおう注意してください。

## 第8話『闇はすべてをのむ』

「やめなさい!!」

凜とした声が響く。ああこれは久しぶりに聞くあの佐奈の声だ。

「佐奈、ごめんね。」

精一杯声を絞り出す。

「俺は、佐奈を殺しかけた。だから、俺には佐奈の近くにいる必要がないんだ。だから、さようなら。輝佐奈をよろしくね。」

そして俺は、自分の腕にナイフを突き刺した。

「やめて~~~~~!!」

佐奈の叫び声が聞こえた。輝がこちらに来る。そこで俺の意識は途絶えた。

『一夜~~~~!! 遊ぼうよ~~~~!!』

『うん!!』

俺は満面の笑みを浮かべて返事をする。

『今日はさあ、かくれんぼしようよ!!』

『じゃあ俺が鬼ね。1、2、3.....』

俺は、貴族ということで王子の輝とはよく遊んでいた。

『10!! よし。輝はどこ言ったかな~~~~!! あ! いた! 輝みつけ!』

『あれ? もうみつかつちやた。あのさ、二人だとおもしろくないからおかあさんいれてもいい?』

おかあさん.....きつと、鈴女王のことだろう。

『いいよ!!』

その返事を聞くとすぐさま輝は鈴女王を呼んできた。鈴王女は白が似合う。おとなしいというより活発なほうだ。

『あら、一夜君こんにちは。で、輝なにするの。』

『さっきまではかくれんぼをやってたんだけど、鬼ごっこがやりた  
い！！』

「じゃあ、鬼ごっこをやしましょう。では、一夜君がおにね。」

こうして、鈴女王を交えた鬼ごっこがはじまった。

「もう、逃がさないぞ!!」

俺は鈴女王を崖のほうへおいつめた。

『あら、どうでしょう。』

えいっ！！

鈴女王に勢いよくタッチしたそのとき！！

「きゃ ああああああああああああ！……！！！」

鈴女王は闇の中へ落ちていった。

あああああああああああああああああああああああ  
おれはおれはおれはおれは鈴女王をああああああああ  
あ突き落としたああああああああああああああああ  
あああああのきれいなしろい鈴女王をああああああ  
あああああああああああああああああああああああ  
ああああああああひかるひかるごめんごめんごめん・・・  
あああああああああああああああああああああああ  
あああああああああああああああああああああああ  
れはおれはおれはここからにげなきやにげていけない  
とああああああああああああああああああああああ  
ああああああああああああああああああああ鈴女王ごめんなさい

闇は、涙を悲鳴を謝罪をすべてすべて飲み込んでいく……

## 第8話『闇はすべてをのむ』（後書き）

どうも、ラッキーラインです。今回は、一夜君の過去が入ってきてます。一夜君の過去編はもうすこしあとにかく予定です。さて、今回は佐奈視点です。ではまた次回！！

## 第9話『泣かないで……』

「一夜！一夜！いやあああ………！」

佐奈が、一夜の腕から大量に流れる血を見て悲鳴を上げる。まさか、一夜がそんなにシヨックをうけているとは思わなかった。僕は、佐奈の肩を撫でながらそつとつぶやいた。

「大丈夫。一夜はそんな簡単には死なないよ。」

佐奈の耳には声が届かなかったらしくまだ泣きつづけている。佐奈は泣き過ぎて目が赤くなってしまうている。

「一夜を、僕の城に運ぶよ。」

この言葉を聞いた佐奈は、一旦泣くのをやめた。

「城には、こぶ？」

ずつとなっていたからか言葉が途切れ途切れになっている。

「このまま見殺しには出来ないだろ。……一夜は僕の親友なんだからな。」

「え………。」

佐奈がびつくりしたような顔をする。このさい後で話しておこう。まずは、一夜を運ぶのが先だ。

「ユウ、コウ、ライ。一夜を背に乗せて走れるか？」

「大丈夫でやんす！」

「じゃあ、乗せてつてきれ。急いでだぞ！」

「……はい！」

ユウ、コウ、ライはいい返事をする。一夜を乗せて走り出した。

「佐奈。僕たちも行こう。」

「うん………。」

僕と佐奈はユウ、コウ、ライの後を追って走り出した………。

「おかえりなさいませ輝様……そっそのかたは?!」

「僕の親友だ。毒が塗られているナイフが腕に刺さっていて危険な状態だ。今すぐ医者を。」

「はっはい!」

じいはいいで医者を手配し、部屋も用意してくれた。

「まだ、全身に毒はまわっていないですが、一応解毒効果が期待できる薬をうつておきました。それと、傷がふかいのでなるべくうでを動かさないよう言ってください。」

「ありがとうございます。」

医者は、急なことに関わらず丁寧にみてくれた。おかげで大事に至らずにすんだ。

「一夜……。よかった……。」

佐奈はだいぶ落ち着いていた。さすがに来る途中ではないたりしていたが落ち着いてよかった。

「佐奈。一夜は、いい奴なんだ。なんで、泥棒になったのかは知らないけれど根はすぐやさしいやつなんだ。だからこそ佐奈を傷つけてしまったことによるショックが大きかったんだろう。」

「うん……。でも、さっき輝が一夜は親友だと言ってたけどなんで? 一夜と輝は敵同士じゃないの?」

「確かに、僕と一夜は敵同士だ。だけど元々は……」

「……」

「元々は?」

「元々は一夜は貴族なんだ。」

「ええ! そんな、じゃあなんで指名手配犯に?」

佐奈は、やはり知らなかったらしい。このさいすべて話してしまお

う。

「話そう。僕と一夜の全てを」

.....「。」

過去編『輝の過去1』（前書き）

輝過去編。一夜過去編もちよっといっています。

## 過去編『輝の過去1』

『輝！はやくはやく！』

『待つてよ！一夜。』

僕と一夜は小さい頃からよく遊んでいた大親友だった。一夜の家は上流階級の貴族の中でも一番王室に近い貴族だった。だから、一緒に遊ぶことが多くとても仲がよかった。

『輝。一夜君。おやつがありますよ！』

僕の母さん……レイ女王は戦争で死んだ僕の父さん……光星国王の代わりに国の頂点に君臨していたんだ。でも、休みの日は母さんと僕と一夜でお茶会をしたり遊んだりしてたんだ。母さんは日だまりのように暖かくてやさしい人だったんだ。

『今日のおやつはクッキーよ。』

『わーい！クッキー僕好きなんだ！』

『俺も！』

『たくさん召し上がれ。』

『いただきます！』

母さんが焼くクッキーは甘くてとてもおいしいんだ。だから、一夜も僕もクッキーが大好きだったんだ。

『ふう。おいしかった。』

『うん。おいしかったね。』

『なにしておぼつか？鬼ごっこなんてどう？』

『いいね！母さんは？』

『そうね……』

『レイ女王様。大臣が呼びです。』

『あら、大臣が？ごめんね輝。私はやれなくなっちゃったから一夜君と仲良く遊んでなさい。』

『はい。』

母さんは、いろいろと忙しくて休みの日も仕事があったくらいだった。

たんだ。

『一夜。なにして遊ぶ？』

『うんとね……。』

『輝様。勉強の時間ですよ。』

『ええええええ！僕、一夜と遊びたい。』

『だめですよ。さあ、先生がお待ちですよ。』

『むう。しょうがないなあ。一夜、僕勉強しなくちゃいけないから、また明日遊ぼうね。』

『うんつ。また、明日ねええええ！バイバーイ！』

僕もいろいろ忙しくて遊んでる途中で勉強しなければならない時があつたんだ。だから、一夜にはときどきさみしい思いをさせていたかもしれないね。それに、一夜の家は家庭事情が難しくて父親が3回も再婚してるから母親がごろころかわっててかわいそうだった。でも、一夜は元気いっぱいでも今よりも明るかつたんだ……。僕の母さんが死ぬ……いや殺されてしまうまでね。

ある日のことだった。僕と一夜と母さんは広い草原に来ていたんだ。

『わー！すごいすごい！広い！』

『うんつ！広い広い！』

『そうねえ。』

『ねえ、母さんなにかして遊ぼうよ。』

『いいわよ。一夜君は？』

『俺も一緒に遊ぶ！』

『じゃあ、鬼ごっこしよう！』

『うんつ！』

『じゃあ、俺が鬼ね。』

僕達はいつものように鬼ごっこをはじめた。だけど……場所がわるかった。まさか、母さんが死ぬことになるとは思ひもなかった……。

過去編『輝の過去2』（前書き）

輝過去編パート2

## 過去編『輝の過去2』

「まで……!!」

一夜は、昔から走るのが早く、輝よりも馬術や剣術に冴えていた。

「待たない……!」

タッチされてしまった僕は一夜を追いかけたがおいつかず、あきらめて母さんにタッチした。

『あら、私が鬼ね。』

『ここまで、おいで……!』

一夜が母さんを挑発する。

『えーい!』

母さんが、急いで一夜を追いかけてタッチする。

『えー。また俺が鬼かよ。』

一夜が文句をいいながら母さんを追いかける。一夜は母さんと一緒に谷のほうへ行った。

『きやあああああああああああああ!……!!……!!……!!』

しばらくして谷のほうから悲鳴が聞こえてきた。その悲鳴はまちがはなく母さんのものだったのでびっくりして谷のほうへ向かった。

『あああ……どうしよう……おっ俺のせいで……うあああああ  
あああああああああああああああああああああああああああ  
あああああああああああああああああああああああああああ  
!……!!』

一夜が泣きながら走り去っていく。不思議に思い谷底をみた。すると……

『かつ母さん！？』

母さんが血まみれになっていた。

- - カアサンガ、ナンデシンデルノ？ナンデ？モシカシテイチャガ  
オトシタンジャ？キットソウダ！イチヤメ…………… - -

『一夜……………！いったいなにがあつたんだ？』

僕は、その場に立ち尽くした……………。

過去編『輝の過去3』（前書き）

輝の過去編パート3。

### 過去編『輝の過去3』

『母さん！母さん！母さん！……………』

しばらく僕は泣き叫んでいた。一刻も早く、城のだれかに言わなければならぬのだがそれができなかった。自分が、父の代わりに母さんを守ろうと思っていたのに守ってあげられずたえきれなかった。

しばらく、なにも考えずに立ち尽くしていると母さん専属の執事の璃御がやってきた。

『輝様、どうされたのですか？それに、女王さまは……………』

『……………だ。』

『いついまなんと?!』

『だから……………母さんは、一夜にがけからつきおとされて死んだんだ……………』

『本当でございますか!?!』

『僕、信じたくないんだ……………。だって、だって母さんが死ぬわけないし、一夜がそんなひどいことをするわけがない……………。けど、本当なんだ……………。』

『そうですか……………。一夜様が女王様を……………。』

『……………でも、でも一夜は、一夜は……………。』

……………きつと一夜は、わざとじゃなくてきつときつと偶然母さんがおちてしまったんだ……………

僕は、そう考えて璃御にそう告げただが……………。

『いいえ。それはちがうでしょう。これはきつとわざと落として王

室の力を弱めようとしたにちがいありません。」

無表情な顔で璃御は淡々と告げる。

「一夜様……いや、犯罪者なんですから呼び捨てでいい。………一夜、絶対に捕まえてやらなければ。」

「ねえなんでなんで一夜が犯罪者なの？事故なのに？おかしい！一夜はそんなことする奴じゃない！」

「おかわいそうな女王様。幼い輝様を残して暗殺されてしまうなんて……。捕まえたら絶対に処刑にしてやらなければなりませんね。」

「ちがう！暗殺なんかじゃない！」

「輝様は、だまって待っていてください。警察を呼んで来ます。」

「ちがうんだ！一夜は一夜は絶対にそんなことするはずがないんだ！！！！！」

僕は、その場で叫んだ。

過去編『輝の過去4』（前書き）

輝の過去編パート4。これで輝の過去編は終わりです。

## 過去編『輝の過去4』

『さよなら、母さん。』

今日は、母さんの葬式。僕は、まだ八歳。この若さで両親を失い、国王という地位に立つことになってしまった。周りみんな

『おかわいそうに……………。』

『この歳で国王だなんて……………。』

と口々に言っている。それはいいのだが……………。

『確か、あの貴族の一夜っていう八歳くらいの子供が殺したんでしよう。』

『なんて子供なんでしょうね。まるで悪魔よ。』

こういう、一夜の悪口は聞いていて腹がたつてくる。だが、一夜が突き落としたのは事実だ。そういわれてもしかたないのだろう。でも、でも……………。やはり、親友の悪口はいやなものだ。気付いたら僕は周りに向かって叫んでいた。

『一夜は悪くないよ！きつと、きつと、事故だったんだよ！』

一生懸命伝える。しかし……………。まわりの大人は否定してばかり。嫌になって僕は、森へ抜け出した……………。

『母さん。』

空を見上げてそう呟く。その時！

『おまえさんか。一夜の親友は。』

かすれかかった男の声が後ろから聞こえた。

『だれだっ!』

僕は後ろに振り返ってまじまじと声の主をみた。

『俺は、永久<sup>とわ</sup>。』

一夜は、俺が拾って育てることにした。』

『本当!じゃあ、一夜にはまた会えるんだね。』

僕は、興奮して聞く。

『いいや。もう、友達としては会えない。会えたとしたら次ぎは…敵同士だ。……じゃあな。』

『あっ!』

その、男はそれだけのこしてきた……………。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6479q/>

---

契約に御用心

2011年10月8日13時13分発行